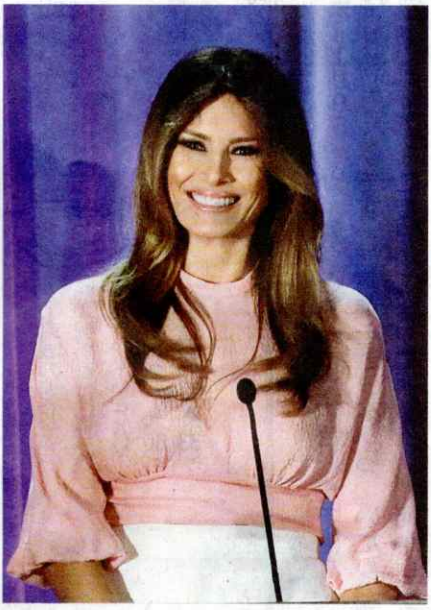
「炎上」にも「クール」崩さず

【メラニア・トランプ】

米国大統領の交代に伴い、2017年からファーストレディーを務めたメラニア・トランプ(50)も役目を終えました。

スロベニア出身の元モデルで、どんな服もゴージャスに着こなす美貌とスタイルの持ち主ですが、ファーストレディーを務めた4年間、一度も主要ファッション誌の表紙を飾ることはありませんでした。前任のミシェル・オバマが計12誌もの表紙を飾ったことと比較すると、米国ではやや冷ややかな見方をされていたと思わざるをえません。

メラニアの外交スタイルの軌跡をたどると、ファーストレディーの定石は一応、押さえていることがわかります。つまり、国内行事ではできるだけ自国デザイナーの服を着用し、他国を訪問する時にはその国に関係のある色柄やデザイナーの服を採用するという伝統を守り、常に優雅な存在感を発揮しています。それでもなお、彼女の装いは「炎上」に事欠きませんでした。



2016年11月撮影

ハリケーンの被災地慰問で高さ10㌢以上のハイヒールを履く、墓地を訪れるのにグッチの巨大なサングラスをかける、イタリアのサミット(約530万円のドルチェ&ガッバーナのコートを着る――。米国人の平均年収ほどの価格が疑問視され、選ばれたこのブランドはボイコット騒ぎに巻き込まれました。

最も記憶に残るのが、移民収容施設を訪問した時に羽織った、ザラのモスグリーンのジャケットでしょう。背中には「I REALLY DON'T CARE, DO U?（どうでもいいわ）」の文字。パロディー製品が続出するなど、炎上を超える現象をもたらしました。

「服ではなく、行動を見てほしい」とメラニアはコメントしていますが、ホワイトハウスの関係者が服を選ぶことは政治的な行動の一つ。メラニアがファッショナブルであればあるほど、ファッションによる政治的、文化的コミュニケーションが空回りした4年間でした。そんなことは「どうでもいいわ」と言いたげなクールな表情は、なんとも魅力的でしたけれど。

（エッセイスト　中野香織）

Style アイコン